

## 人生経験に無駄なことはない

会員 加藤 博太郎



1 先日、自室を整理していると、私のこれまでの名刺がいくつか出てきた。机の上に並べてみると、その数5種類。法科大学院生、行政書士、東京都主税局主事、司法修習生、そして弁護士となった現在の名刺。我ながら、よく20代のうちに、これほどまでの肩書を経験したものだ、妙に感心してしまった。

2 私の20代は、常に司法試験とともにあった。東京都庁職員時代、徴税吏員として弁護士や税理士と折衝していたときも、もし自分が相手の弁護士や税理士の立場だったらどのように対応するだろうか、常に考えていた。税務申告書を通して垣間みえる民間の経済活動に思いを馳せていた。納税者の代理人として活動する専門家の姿に、都税事務所のカウンター越しに憧れを持っていた。ただ、カウンターの向こうの世界は、どこか遠い世界のようにも感じていた。

そして、20代最後の年に、私は弁護士になった。弁護士を志してから、すでに10年以上の月日が経っていた。

3 私は、現在、世界最大級のグローバルネットワークのメンバーファームであるプロフェッショナルファームの弁護士である。

仕事の内容は、契約書のレビューから、ガバナンス対応、労務案件の対応、著作権や広報資料の検討、訴訟支援、リスク判断と多岐にわたる。特徴的なのは、グローバル案件が多いことである。英文契約のレビューはもちろん、グローバルプロジェクトのリスクの検討、グローバルスキームの日本での適合性の検討、それらを外国法弁護士とともに対応していく。数は

少ないものの、海外の法律事務所とともに対応したり、英語以外の外国語で対応したりしなければならない案件もある。グローバル案件を通じて、海外の法制度や考え方に触れ、とても刺激的である。また、国際社会におけるビジネスの大きな潮流を感じることもできる。

4 日々の仕事で常に感じていることは、「人生経験に無駄なことはない」ということである。私は、司法試験に合格するまでは、人生を遠回りしているように感じて、焦ることもあった。また、そのときの経験が、将来の自分にどのようにつながるのかわからず、不安になることもあった。

しかしながら、弁護士の仕事をしてみると、前職での経験が、今の自分を支えていることに気づかされる。前職での税務や行政に関する知識はもちろん、組織の調整方法や、コミュニケーションの取り方、スケジュール管理まで、前職での経験のひとつひとつが日々の仕事に大きく活かしている。前職を経たことは、いつしか私のアイデンティティーになった。

5 昨今、司法制度改革を受けて、若手弁護士の境遇は苦しいように語られることも多い。弁護士という職業の将来を考え、不安になることもないわけではない。

しかしながら、どのような経験や境遇であったとしても、将来につながって、生きていくものと思う。「人生経験に無駄なことはない」、そう信じて、焦ることなく、日々の仕事に向き合いながら、弁護士の道を歩んでいきたい。